

# 明治新政府、勢力闘争と近代化の歩み

## ～旧土佐藩士大目付下村銈太郎盛俊の経歴から読み解く～

横浜歴史研究会 中村康男

はじめに

日本の歴史に残る一大改革であった明治維新は、前の体制である江戸幕府を倒し、新たな体制への移行であった。政権交代を成し遂げた明治新政府は、列強の欧米諸国に負けない国作りに着手したが、そこで西洋文明を模倣する近代化を目指した。近代化の道のりは、決して平坦ではなく、意見の対立や連続した側面と不連続な側面を持ち合わせた。明治新政府における全国統治や近代化という大事業が、どのような統治の行政システムで、どのような人材によって推進されたかを知るうえで、私の高祖父である旧土佐藩士大目付下村銈太郎盛俊の経歴から読み解くことが有意義であったので、ここに記してみたい。

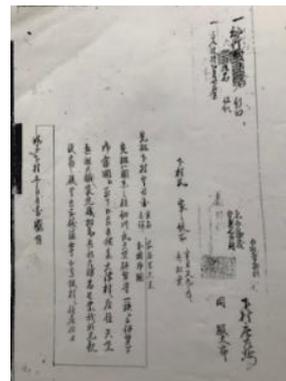
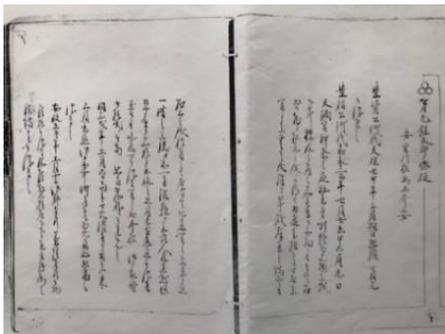
下村銈太郎盛俊 <第9代惣領 天保元(1830)年7月～明治10(1877)年12月(47歳)>

「御侍中先祖書系図牒」より引用

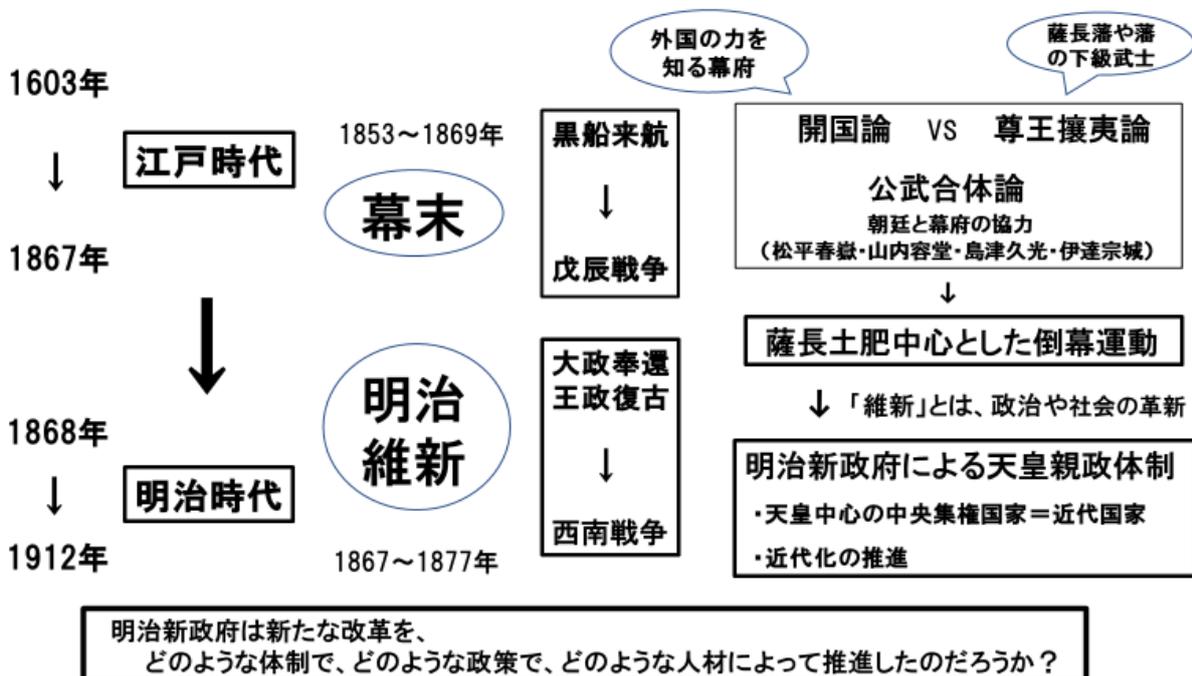
「御侍中先祖書系図牒」(おさむらいちゆうせんぞがきけいずちょう)とは、士格(上級・中級武士)の経歴を記した年譜書で数度にわたり集められ、明治時代まで書き継がれたもの。オーテピア高知図書館所蔵。

【下村庄左衛門、下村銈太郎、下村省助系図】

先祖下村宇兵衛 本国御国即ち土佐国(現:高知県)。元祖下村五郎兵衛盛明(-1622)生国御国即ち土佐国から惣領省助盛吉までの系図。



### I. 幕末から明治維新の時代背景



## II. 幕末の動乱期

### 1. 下村銈太郎盛俊の経歴<文久3(1863)年～慶応3(1867)年>

33歳 福岡宮内組(家老福岡孝茂)の足軽大将・外輪物頭【文久3(1863)年3月】

福岡宮内京都御警護の差添役【同年8月】

大目付【同年10月】

34歳 大目付免職【元治元(1864)年1月】

惣領職召放、安喜川西禁足【同年5月】

<理由:京都在勤中の暮らし方について藩主の気に障ることがあった。殊に重役の身分に対し不心得であった為>

35歳 物部川西は禁足【慶応元(1865)年12月】

37歳 大目付・外輪物頭復職【慶応3(1867)年9月】

### 2. 土佐藩の藩政

- ・嘉永元(1848)年、山内豊信(容堂)が第15代藩主となる。
- ・嘉永6(1853)年、吉田東洋が仕置役(参政)に抜擢され、藩政改革を行うが、1855年に謹慎。
- ・1857年、吉田東洋復帰、後藤象二郎、福岡孝弟など若手を抜擢する。
- ・文久2(1862)年、吉村虎太郎、坂本龍馬脱藩。吉田東洋が武市盟主土佐勤王党により暗殺される。
- ・土佐勤王党が土佐藩政の主導権掌握、この頃、長州藩など尊王攘夷派が台頭する。



<天誅組の変> 文久3(1863)年8月17日

尊王攘夷過激派が元侍従中山忠光を擁して天誅組を結成し、大和拳兵を謀ったが敗れて壊滅した事件。  
土佐勤王党吉村虎太郎自刃。

<八月十八日の政変> 薩摩藩・会津藩・孝明天皇らにより長州藩・三条実美ら急進的尊攘派を京都から追放した事件。急進的尊王攘夷派の勢力が弱まる。

\* 尊王攘夷の台頭と敗退と盛俊の処分は関わりがあると思われる。

## III. 明治新政府の誕生

### 1. 下村銈太郎盛俊の経歴<明治元(1868)年～明治2(1869)年>

37歳 容堂公御側御用役、京都で外交役【明治元(1868)年3月】

(註:五箇条の御誓文が明治元(慶応4)年3月14日公布)

貢士(議事所に出仕して議事に参与した人)【同年6月】

38歳 中納言様(三条実美)の御東行御供【同年9月】

参政公儀人・中納言様御側御用役・京都定詰【明治2年2月】

中老職【同年4月】

東京庶務局主務且つ公用人【同年5月】

39歳 第三等官小参事・東京郵務局公用人、兼職家令(三条実美の家令)【同年11月】

\*山内容堂と三条実美に仕えた盛俊の関わりの深い人物像に触れることとする。山内家と三条家は縁がある。

・山内容堂一正室は三条実美の養女正子。一貫して公武合体論を主張、重用していた吉田東洋が勤王党志士に暗殺され、武市瑞山に憎しみを抱き続け、八月十八日の政変を契機に瑞山を切腹に至らしめた。

・三条実美一筋金入りの尊王攘夷派公家で、長州に強い人脈を持っていた。容堂、豊範とは従兄弟に当たる。

・後藤象二郎一叔父の吉田東洋の暗殺で武市には恨みがあったが、豪放磊落な性格な参政後藤は、幕末期に脱藩組の坂本龍馬を海援隊隊長に、中岡慎太郎を陸援隊長に任命した。また後藤は攘夷論に転換し、大政奉還の立役者となった。明治6年、後藤は征韓論で敗れた後、商社「蓬莱社」を設立、下村盛俊・省助

親子も参画する。蓬萊社は吉田茂の父・元土佐藩の竹内綱が二代目社長になるが経営の不振が続き、同郷の岩崎弥太郎が引き取り、その後三菱鉱業セメント(現三菱マテリアル)になる。

・福岡孝弟一幕末に参政に就き、五箇条のご誓文の起草に加わった。土佐藩の御侍中先祖書系図牒によれば、福岡の妻敏子は下村庄左衛門盛則娘と記載されている。庄左衛門盛則は盛俊の父と同じ名前である。

## 2. 明治新政府の体制 <<統治の行政システム>>

明治新政府の目標 — 近代国家=天皇中心の中央集権国家の成立  
|| 欧米先進資本主義列強諸国と肩を並べること  
↑  
「富国強兵」=経済の発展・軍事力強化、近代化の推進

(1) 明治政府の基本方針=五箇条の御誓文—由利公正が起草、福岡孝弟が修正、木戸孝允が加筆。

(2) 明治新政府が取り組んだ政策

- ① 版籍奉還(1869年)と廃藩置県(1871年)
- ② 学制交付(1872年)
- ③ 徴兵令(1873年)
- ④ 地租改正(1873年)
- ⑤ 殖産興業⇒資本主義的生産様式による近代国家

(3) 明治新政府の中央官制における勢力争い

- ・政治と行政の実権—薩長土肥の四藩出身の官僚。 官吏登用人事では<薩摩 VS 長州>の構図
- ・政治と行政の実務—志士出身+幕臣出身者。 \* 洋行経験者が実力を発揮した。
- ・官吏登用人事で薩長の対立 <薩摩 VS 長州>  
→大久保利通と木戸孝允・伊藤博文の妥協の産物

△廃藩置県後の行政システム 太政官三院制【明治4(1871)年7月制定】  
藩閥政治「薩長土肥」出身者中心の政府

正院

太政大臣 三条実美(公家)  
右大臣 欠員(後に岩倉具視)  
参議 木戸孝允(長州) 西郷隆盛(薩摩) 板垣退助(土佐) 大隈重信(肥前)

左院

【議長】欠員 【副議長】江藤新平(肥前)

右院

神祇卿	【卿】欠員	【大輔】欠員
大蔵省	【卿】大久保利通(薩摩)	【大輔】井上薫(長州)
兵部省	【卿】欠員	【大輔】山県有朋(長州)
司法省	【卿】欠員	【大輔】佐々木高行(土佐)
外務省	【卿】岩倉具視(公家)	【大輔】寺島宗則(薩摩)
工部省	【卿】欠員	【大輔】後藤象二郎(土佐)
宮内省	【卿】欠員	【大輔】万里小路博房(公家)
文部省	【卿】大木喬任(肥前)	【大輔】欠員
開拓使	【長官】東久世通禧(公家)	【次官】黒田清隆(薩摩)

3. 工部省における下村盛俊の立ち位置と勢力争い 《近代化の推進役・技術官僚》

\* 明治3(1870)年10月、盛俊が出した木戸孝允への書簡

(木戸孝允関係文書4より)

301 下村鉦太郎

2 明治(3)年閏10月23日 人二一八

寒氣晨夕難堪御坐候得共愈御清穢御奉職奉欣然候。賤弟碌々致送日候。陳は今般藩政改革之儀申上度件々有之、昨日板垣退助、福岡藤次参着仕候。然に此度は輔相、納言、参議諸公御列席候間にて公然議事仕度、方今猜忌不少候傳は先生へ拜趨し御内話仕候義徳と差扣候間、右議事の席へは先生必御列座被下、当否御弁論被下候様仕度、然後に尊宅へ罷出委曲可申上、此段小生より先生へ先得芳意置候様兩人より被相頼候に付、不取敢申上候。前条議事は独り藩政のみならず候間、宣敷御含置至急に相運候様御周旋奉伏願候也。敬白

閏十月廿三日 下村鉦太郎

参議木戸君閣下

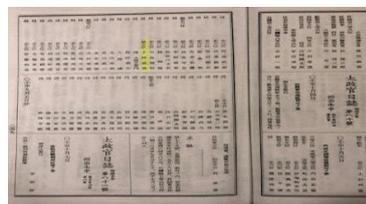
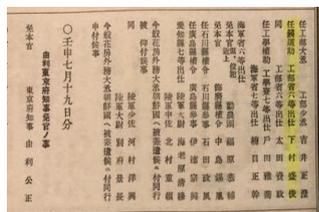
木戸孝允宛てに、藩政改革の会議に出席してほしいと依頼した書状で、この会議は輔相、納言、参議が参加する重要な会議だったようです。昨日板垣退助と福岡藤次(孝弟)が来た。本来であれば、会議の前に木戸に内々に会って下話をすべきところを、今回はあえてそれをせず、直接会議に参加してもらって忌憚のない意見を述べてもらいたいといった内容のようである。

\* 太政官制(明治2年7月8日) 神祇官 [伯]中山忠能 [大副]白川資訓 [少副]福羽美静  
太政官 [右大臣]三条実美 [大納言]岩倉具視、徳大寺実則 [参議]前原一誠(長州)、副島種臣(肥前)  
当初主要官職は皇族と公家が独占して、武士階級は薩長土肥の参議の2人と民部卿に松平春嶽であったが、それに岩倉と三条が反発し、大輔に広沢真臣、佐々木高行を追加させ、後に参議に大久保利通、木戸孝允が加わった。

- (1) 明治3年、工部省の誕生 = 社会基盤整備と殖産興行の推進役  
明治3年10月20日に工部省の設置が決定したが、部局の組織には時間を要し、明治4年8月が発足した。
- (2) 鉄道の建設方針の対立 <長州・佐賀 VS 薩摩>  
近代化推進の柱 = インフラ事業 = 激しい権力闘争の歴史  
推進派の伊藤博文・大隈重信 × 反対派の西郷隆盛・大久保利通
- (3) 明治4年、工部省の後藤象二郎が大輔に就任し、文書局責任者下村盛俊、次席海援隊出身長岡謙吉、会計局少丞吉井正澄ら土佐藩出身の人材が登用された。
- (4) 同年8月、鉱山頭兼鉄道頭に井上勝(長州五傑・長崎海軍伝習所組)が就任した。技術官僚。  
工部大輔は後藤⇒伊藤博文⇒山尾庸三と引き継がれた。 <土佐藩→長州藩開明派官僚>  
長州英国留学組(伊藤博文、山尾庸三、井上勝、竹田春風)と、  
長崎海軍伝習所出身組(佐野常民、矢田堀鴻、佐藤政養、小野友五郎)が実権を握る。
- (5) 明治5年8月27日、下村盛俊が鉄道助に就任した。(明治7年に退官)
- (6) 同年9月12日(新暦10月14日)、新橋～横浜間日本初の鉄道が開通した。  
明治天皇が乗車したお召列車の8号車に「鉄道助」として乗車した。  
<岩倉使節団の欧米諸国歴訪の為、政府の主要メンバーが乗車していない。>  
8月に工部省内鉄道寮新設、鉱山頭兼鉄道頭井上勝、工部大輔の後藤は在職3か月で転出し、後任に伊藤博文が就任、その後工部少輔山尾庸三が昇進した。  
長州藩出身の開明派官僚が地歩を固めていった。権大丞の山尾庸三と井上勝体制となった。

<土佐藩→長州藩開明派官僚>

太政官日誌より  
(国立国会図書館)



【工部省 明治5年の組織・人事】

【鉄道寮 明治4年新設】

卿		(空席)
大輔	従四位	伊藤博文(長州)
少輔	正五位	山尾庸三(長州)
三等出仕兼燈台頭	従五位	佐野常民(佐賀)
大丞	正六位	吉井正澄 (土佐)
少丞	正六位	矢田堀鴻(幕府)
六等出仕	従六位	石井忠亮(佐賀)
六等出仕	正七位	安永弘行(佐賀)
六等出仕	正七位	宇都宮義綱(幕府)
六等出仕	正七位	大野 誠(新発田)

頭	正五位	井上 勝(長州)
権頭		(空席)
助	正六位	竹田春風(長州)
助	正六位	佐藤政養(蘭学者)
助	正七位	河口 淳
助	従七位	下村盛俊(土佐)
助	従七位	太田資政(通訳)
権助	従六位	佐畑信之
七等出仕	従六位	伊藤勅典
七等出仕	従六位	花房端連(備前岡山)
七等出仕	従六位	和田義比
七等出仕	従六位	小野友五郎(笠間)
七等出仕	従六位	田尻義隆

4. 幕末・明治維新期の遣外使節 《江戸時代から明治時代への連続性》

(1)最大の派遣は明治政府が欧米に派遣した岩倉使節団

- ①視察時期、1871年(明治4年)11月に横浜を出航
- ②視察期間、約1年10カ月
- ③視察先、米、英、仏、ベルギー、オランダ、ドイツなど欧米主要国13か国
- ④参加メンバーは、特命全権大使岩倉具視、副使大久保利通・木戸孝允・伊藤博文・山口尚芳ら総勢107名、平均年齢は32歳、津田塾大学の創始者津田梅子は満6歳で随行した。
- ⑤使節団の目的は、
  - a.天皇国家の誕生に伴う幕末条約締盟国への挨拶回り
  - b.条約改正予備交渉、これは失敗
  - c.西洋諸国の政治、軍事、産業、文化、生活などあらゆるものを見聞・情報収集

(2)この時期に、なにをやろうとしたのか？

明治政府は、欧米の列強諸国に日本が飲み込まれてしまうという脅威を抱いていた。従って、明治政府が富国強兵・殖産興業の目標を掲げ、欧米列強に負けない強い国づくりを目指した。西洋諸国の政治、軍事、産業、文化、生活などあらゆるものを見聞し、学び、手本とした。



使節団の大久保利通や木戸孝允は、留守政府に大きな改正や極力人事は行わないことを約束させたが、留守居役の三条実美、西郷隆盛、井上馨、江藤新平らはその約束を反故にした。最も激怒させたのが、征韓論であった。使節帰国組と留守組の権力闘争が引き金となり明治六年政変が起こり留守組の西郷隆盛・江藤新平・板垣退助・後藤象二郎・副島種臣は下野した。その後、西郷は西南戦争へ突入し、板垣をはじめ他の4名は自由民権運動を始める。

(3)江戸時代の海外派遣

岩倉使節団派遣に先立ち、江戸時代に10回に及ぶ海外派遣があった。派遣元が江戸幕府や藩によるもの、形態が視察団や留学生、派遣先も欧米諸国・ロシア・上海と多岐に亘っていた。

イ. 江戸幕府の海外派遣 目的は海外交渉

- ①1860(万延元)年、万延遣米使節団一護衛として咸臨丸派遣(勝海舟・ジョン万次郎・福沢諭吉)。
- ②1862(文久元)年、文久遣欧使節団(第1回遣欧使節)一福沢諭吉は2度目の体験。
- ③1862年、上海使節団第1次派遣一高杉晋作、五代友厚。第2、3、4次と回を重ねた。
- ④1862年、オランダ留学生派遣、1865年ロシア、1866年英国、1867年仏国と実施した。
- ⑤1864年、第2回遣欧使節団(横浜鎖港談判使節団、文久遣仏使節団)
- ⑥1866(慶応2)年、慶応遣露使節団
- ⑦1866年、遣露使節団

#### ロ. 藩独自の海外派遣

- ①1863年、長州五傑の留学一長州藩が密航という形でマセソン商会社長を世話役として山尾庸三、井上勝、遠藤謹助、伊藤博文、井上馨を派遣、彼らは明治新政府で近代化の中核として活躍した。
- ②1865年、薩摩藩遣英使節団一薩摩藩が新納中三、五代友厚、松木弘安(寺島宗則)の3人から成る外交使節団を、町田久成、森有礼ら15名の留学生と共にイギリスに派遣した。

#### ハ. 幕府が派遣した主な洋行経験者

主な洋行経験者は福沢諭吉、渋沢栄一、西周、寺島宗則、小野友五郎、勝海舟、ジョン万次郎である。彼らの活躍は周知の通りであるが、「グローバル幕末史」(町田明広著)によると江戸時代までの留学生数は総勢約130名であり、その内訳は、幕府57名に対し、薩摩藩26名、長州藩16名、佐賀藩・土佐藩各2名となっている。この人数の多さには驚くばかりである。

明治新政府における勢力争いにおいて、薩長が土肥より優位な立場にあったことは、この数字からも読み取れる。

#### 二. 明治新政府が引き継いだ江戸幕府の路線

江戸幕府の海外派遣は、西欧諸国の脅威を身を持って知り、幕府の首脳部の開国決断に影響を与えた。一方で、明治新政府の首脳も倒幕時の攘夷、開国反対から開国に路線変更をしたのも洋行経験によるところが大きいと思える。明治維新は倒幕運動でスタートし一連の改革を実行してきたが、江戸幕府の海外派遣は引き継がれ、一連の洋行経験は若い人材を育て、制度・技術・文化などの貴重な見聞録は、後の明治の近代化の実現に役立ったと言える。ここに江戸時代から明治時代への連続性を見ることができる。

#### 主な参考文献

- 「土佐藩」平尾道雄(吉川弘文館)
- 「明治零年代後半における洋行官僚に関する一考察」関西大学経済論集 柏原宏紀著
- 「坂本龍馬と明治維新」マリアス・ジャンセン著(時事通信社)
- 「工部省とその時代」鈴木淳著(山川出版社)
- 「近代天皇制の展開」遠山茂樹編お召列車論序論原田勝正(岩波書店)
- 「日本鉄道業の形成」中村尚史著(日本経済評論社)
- 「三菱の経営多角化」小林正彬著(白桃書房)
- 「高島炭礦史」三菱鉱業セメント株式会社
- 「幕末・明治のテクノクラート(technocrat:技術官僚)小野友五郎」藤井哲博著
- 「明治の技術官僚」柏原宏紀著(中公新書)
- 「世界を見た幕臣たち」榎本秋著(洋泉社)
- 「幕末遣外使節物語」尾佐竹猛著(岩波文庫)
- 「グローバル幕末史」町田明広著(草想社)